1　つぎの　けいさんを　しましょう。

（1）　3＋6＝ **9**　　（3）　9－4＝ **5**

（2）　9＋5＝ **14**　　（4）　13－8＝ **5**

2　男の子が　6人、女の子が　9人　います。
女の子は、男の子より　なん人　おおいでしょうか。しきを　かきましょう。

しき　**9 － 6**

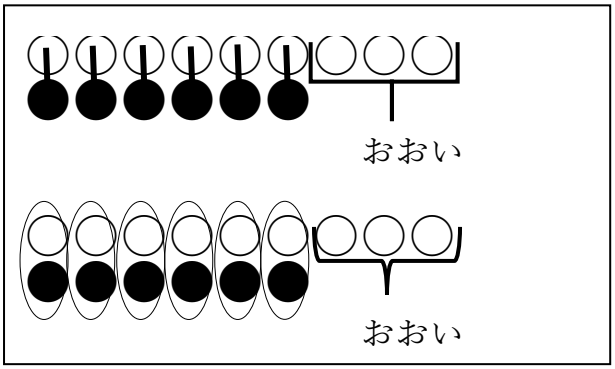
問題		評価基準及び割合（%）A ■ C □			0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
1	（1）	A	C	平成26年度	98 / 2
		正答	誤答・無答	平成28年度	98 / 2
				平成30年度	98 / 2
	（2）	A	C	平成26年度	97 / 3
		正答	誤答・無答	平成28年度	98 / 2
				平成30年度	97 / 3
	（3）	A	C	平成26年度	96 / 4
		正答	誤答・無答	平成28年度	97 / 3
				平成30年度	96 / 4
	（4）	A	C	平成26年度	94 / 6
		正答	誤答・無答	平成28年度	95 / 5
				平成30年度	94 / 6

1　１位数＋１位数＝１位数または２位数や、１位数または２位数－１位数＝１位数の計算ができるかをみる問題である。加法・減法ともに正答率94%を超え、高い正答率である。おはじきやブロック等の半具体物を用いて「計算の意味を理解し、計算の仕方を考え、習熟する」という一連の活動を重視していきたい。また、10の補数を直観的にとらえるよう、10の合成・分解については繰り返し指導したい。この数感覚を身に付けることは、加法・減法・乗法・除法すべての計算に共通して重要である。

問題	評価基準及び割合（%）A ■ C1 □ C2 ▨ C3 ▥					0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
2	A	C1	C2	C3	平成26年度	73 / 6 / 18 / 3
	正答	6－9	たし算の式	左記以外の誤答・無答	平成28年度	77 / 5 / 15 / 3
					平成30年度	75 / 6 / 15 / 4

2　求差の減法の立式が正しくできるかをみる問題である。正答率は前回から２ポイント下がり75%となった。誤答の中で最も多いのは、この問題を加法の場面だと考え「6＋9」や「9＋6」と立式した児童で15%いた。問題文の「なん人おおいでしょうか」という表現から加法だと考えた児童がいると考えられ、減法の場面であることを理解していないことが分かる。正しく立式できるようにするために、指導の際には問題場面を図(図1)のように表したり、おはじき等を使って実際に児童に操作させながら考えさせたりすることが重要である。数値と図を対応させながら、1対1対応した部分と、対応しなかった部分の意味を問い、操作を通して十分に理解させたい。

（図１）



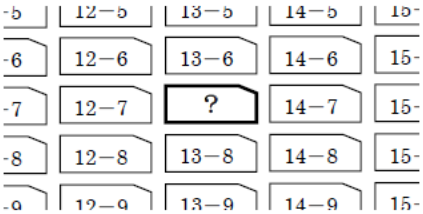
3　□ の 中に あてはまる かずを かきましょう。

2	12	22	32	**42**	**52**	62

問題	評価基準及び割合（%） A■ B■ C□				0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
3	A	B	C	平成26年度	86 / 5 / 9
	完答	42 と 52 のみ正答	左記以外の誤答・無答	平成28年度	86 / 5 / 9
				平成30年度	85 / 5 / 10

3　数の規則性に着目して、正しく数系列を構成することができるかをみる問題である。３つの□のうち、右の２つは正答で、左端だけあてはまる数をかけなかった誤答は５％と変わらなかった。数系列の指導では、左から右に数の変わり方をみていくと「10 ずつ増えている」や「一の位の数は変わっていないが、十の位の数が１ずつ増えている」などのきまりに気付くことができるようにしたい。また、左から右に見るだけでなく、右から左に数を見る見方も養いたい。例えば、「２とびの数」「５とびの数」等の指導の際には、数と数の間がいくつ違うか書き込むことで累減する（数が減る）方向への数の見方を指導することも大切である。

4　ひきざんカードを じゅんじょよく ならべています。あいている ところ には、どんな カードが はいりますか。あてはまる カードを かきましょう。



13-7

問題	評価基準及び割合（%） A■ C1□ C2▨ C3▥				0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
4	A	C1	C2	C3	平成26年度 90 / 2 / 1 / 7
	正答	被減数が13の式	減数が7の式	左記以外の誤答・無答	平成28年度 91 / 2 / 1 / 6
					平成30年度 91 / 2 / 1 / 6

4　カードの並び方の規則性に着目して、正しい式を考えることができるかをみる問題である。計算カードを使った活動では、計算の習熟を図るだけでなく、規則性に着目するなど数学的活動を通した指導の工夫を充実していきたい。具体的には次のような指導を取り入れたい。

・被減数または減数が同じ数のカードを並べ、答えの変わり方のきまりを見付ける活動

（具体例）12－５＝７
　　12－６＝６
　　12－７＝５

・同じ答えになるカードを探し、被減数と減数の変わり方にきまりがあることを見付ける活動

（具体例）12－５＝７
　　13－６＝７
　　14－７＝７

上記２つの活動を踏まえて、カードを順序よく並べて整理し、空いた部分のカードを規則性から考える活動
これらの活動を通して、一方が増えると一方は減るといった関数的な見方・考え方の素地も養っていきたい。

5 □ の 中に かずを いれて、こたえが 9に なるように しましょう。

（1） □ － □ ＝9　　（2） □ － □ ＝9

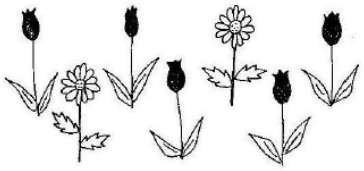
（正答）10-1　11-2　12-3　……　19-10 などから２種

問題	評価基準及び割合（%） A■ B■ C□				0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
5	A	B	C		
	完答	１問正答	左記以外の誤答・無答		
				平成26年度	87 / 8 / 5
				平成28年度	88 / 7 / 5
				平成30年度	88 / 7 / 5

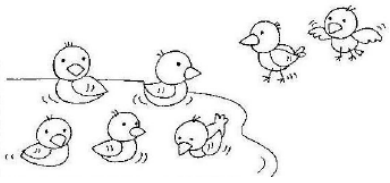
5　答えが９になる減法をつくることができるかをみる問題である。正答率は、88%と前回から変わっていない。1の(4)の２位数－１位数＝１位数の正答率は 94%であるが、□－□＝９のような問われ方をすると正答率が下がることが分かる。□に当てはまる数はたくさんあるという数感覚を養うために、本問題と似たようなオープンエンドの問題に触れさせたい。また、被減数・減数・差の関係を順序よく捉えさせるために、カードを用いることも有効である。

6　５＋２の しきに なるのは どれですか。ばんごうを １つ えらんで かきましょう。

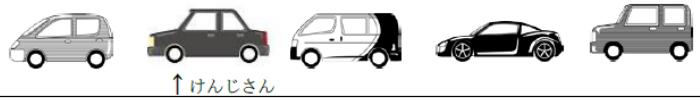
① 赤(あか)い はなが ５本(ほん)あります。
白(しろ)い はなが ２本あります。
ちがいは なん本ですか。



② とりが ５わ います。
２わふえました。
ぜんぶで なんわに なりましたか。



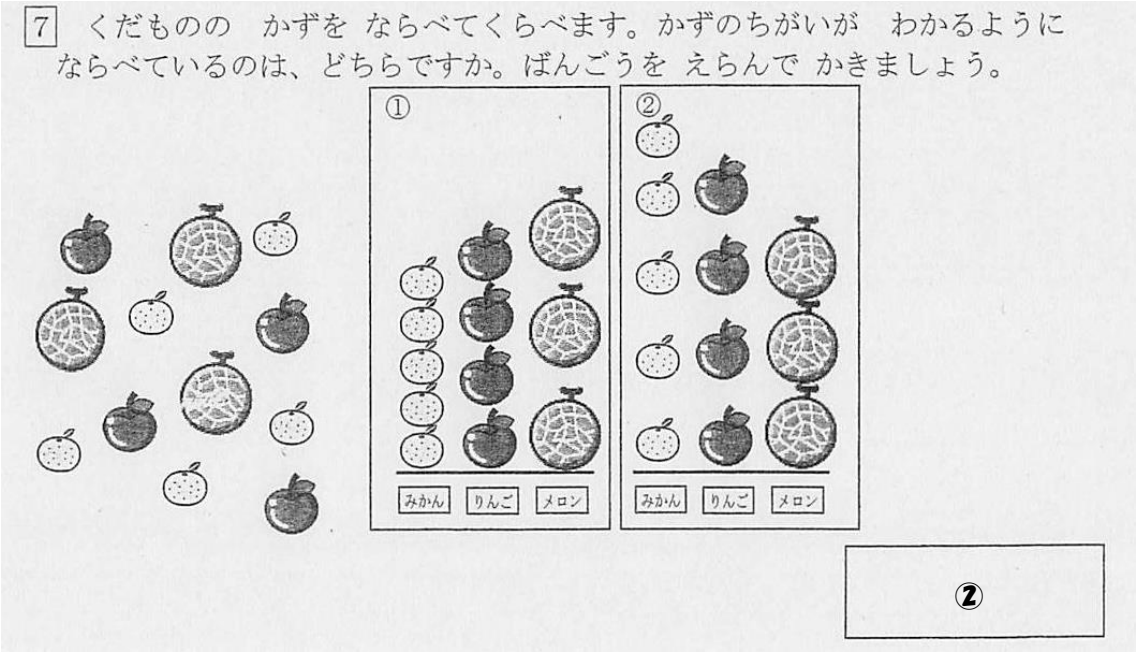
③ じどうしゃが ５だいならんでいます。 けんじさんは まえから ２ばんめの じどうしゃに のっています。けんじさんが のっている じどうしゃの うしろには なんだい ならんでいますか。



②

問題	評価基準及び割合（%） A■ C1□ C2▨ C3▥				0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%
6	A	C1	C2	C3	
	正答	①	③	左記以外の誤答・無答	
				平成26年度	79 / 4 / 5 / 12
				平成28年度	81 / 3 / 4 / 12
				平成30年度	80 / 4 / 4 / 12

6　式を読み、具体的な問題場面と結び付けて考えることができるかをみる問題である。正答率は、80%で例年と変わっていない。①を選んだ児童は、絵だけを頼りに加法と捉え誤答したと考えられる。また、③を選んだ児童は、問題文の数値のみを頼りに立式していることが考えられる。「あわせて」「ぜんぶで」「ちがいは」「のこりは」などのキーワードで立式する方法は一定の効果はある。しかし、具体物の操作を通して、場面の理解を深めて、立式に結び付ける指導もあわせて行うことが大切である。

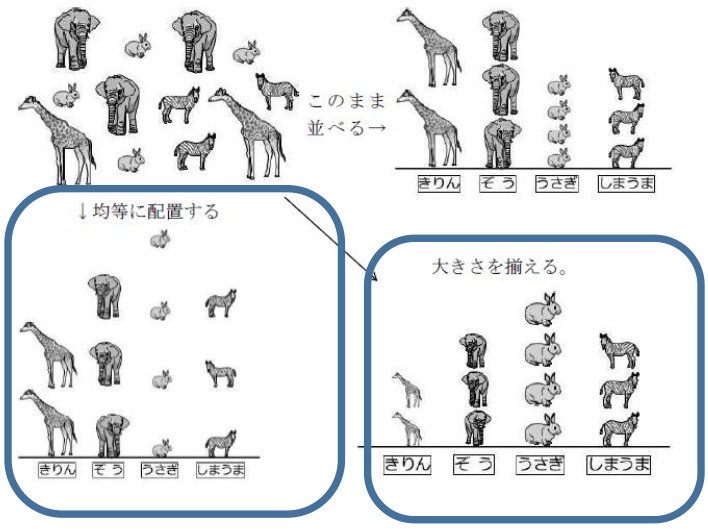


問題	評価基準及び割合（%） A ■ C1 □ C2 ▨ C3 ▥					
7	A	C1	C2	C3	平成26年度	85 / 3 / 7 / 5
	正答	①	③	左記以外の誤答・無答	平成28年度	85 / 3 / 7 / 5
					※平成30年度	52 / 41 / 7

【年度の横の記号は、☆：上の学年から下りてきた問題　※：この年より問題の一部を変更して実施している問題】

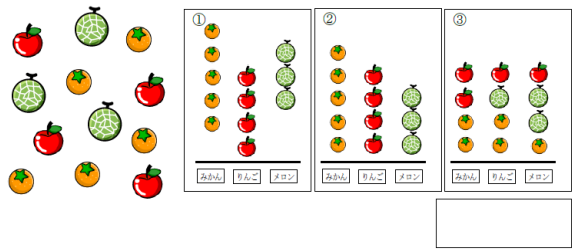
7　ものの個数を比べるときに、大きさや種類をそろえて表すことができるかをみる問題である。本問題に関連する事項として新学習指導要領では下記(図 2）のように明示された。そのことを踏まえて、問題を改定し、大きさにとらわれず個数に着目して、下端をそろえて高さで個数を比べる図が選択できるかをみた。結果は約半数の正答にとどまった。大きさや位置に気を付けて絵や図に表現することで、１対１の対応をした上で、均等に並べたり、大きさをそろえたりする比べ方を考え、「高い＝多い」ことが一目で分かるよさに気付かせたい。この指導はこれからのデータの活用領域での素地になる。また、指導要領には咲いたあさがおをグラフに表す活動（算数科指導要領解説編 101 ページ）も例示されている。教師が色や個数などの観点に着目させる発問をし、観点を決めてグラフに表すことで伝えたいことの分かりやすさが変わったり、比較の仕方が様々あったりすることも伝えていきたい。

（図２）



どちらも適切に比べられていることをおさえる。

前回実施問題



解答類型を見直し、今回実施問題では２択になっている。